

2010 年度

シンポジウム

「言葉・身体・空間」7月18日  
坂手洋二（劇作家）、柴田勝二、谷川道子、柳原孝敦

「世界文学としての村上春樹」12月11日  
都甲幸治氏（早稲田大学准教授）、藤井省三氏（東京大学教授）、  
加藤雄二、亀山郁夫、柴田勝二、村尾誠一

総合文化研究所共催講演会

「ホロコースト文学表象の未来：第二、第三世代のユダヤ系ア  
メリカ小説家たち」5月20日  
Alan L. Beger（フロリダアトランティック大学教授）

「たゆたう国々」11月4日  
山崎佳代子（詩人、翻訳家、ペオグラード大学文学教授）

公演

「語りと劇による『源氏物語』7月18日  
柴田勝二（脚本）、外大生有志

2011 年度

総合文化研究所共催講演会

「『空白』をつなぐ旅～記憶の彼方、コトバの行方」7月7日  
姜信子（作家）

劇とシンポジウム 12月11日

劇「子規 六尺の天地」柴田勝二氏（脚本・演出）  
シンポジウム「子規と漱石の近代」  
関川夏央（作家）、牧村健一郎（朝日新聞記者・文芸評論家）  
柴田勝二、橋本雄一、村尾誠一

連続文化講演会「交通する言葉と文化」

「ゆらぐ肖像、ざわめく言語——日本植民地期の大連に中国語  
新聞の広告を観察する」2012年1月19日  
橋本雄一

「額のX——スペインでメキシコを考えるアルフォンソ・レイ  
ェス」2012年1月26日  
柳原孝敦

「ブルースとジャズ」2012年1月31日  
加藤雄二、類家心平（ジャズトランペッター）

「韓国から見た日本文学」2012年2月9日  
朴裕河（韓国世宗大学教授）

前号で柴田勝二氏のお名前の英語表記に誤りが  
ありましたので、お詫びして訂正いたします。

編集後記

本来であれば昨年度末に刊行されるべきであった本誌十四号が、残念ながら諸般の事情で刊行できず、今回、十四、十五合併号というかたちでの刊行とならざるをえなかったことを、なによりも編集責任者として、読者の方々ならびに研究所員の先生方に深くお詫び申し上げます。また、今号の刊行に際しても、本研究所所長の柴田勝二先生の主導のもとで、教務補佐の大学院生の方々のご尽力に全面的に支えられ、十分な貢献をなしえなかつた点もまた、ここで改めてお詫び申し上げておきたい。

言語とその空間表象との関連を検討するという与えられた主題は、多くの事例を喚起し、思考を様々な局面に誘導しえるものだが、ここではごくささやかな記述にとどめておくことにしよう。たとえばあるひとつの語が書かれ、それに続くもうひとつの語が選択された場面を想起してみよう。たとえば、四月という主語に続く「残酷な季節」という語群のように。この二つの語の連鎖を読むという行為は、これらの語の間隙に折り込まれ、畳み込まれた無数の小さな思考の折り目をその潜在性において開いてみることを要請せざるをえない。そのとき、これら二語の語群の explanation とはこの小さな間隙を、限界なき砂漠状の広がりへと押し広げる行為以外のなにものでもなく、読者は彷徨を余儀なくされるのだから、ここにも空間的な暗喩の体系への扉は開かれているかもしれない。

個人的な回想になるが、かつて多くの教室で、講読ないし訳読という授業形態が支配的に採用されていたように思う。ところがこの種の授業の弊害が喧伝され、徐々に駆逐される傾向が顕在化するこの時代に、新たに講読という形式を採用してみたいという誘惑に強く駆られている。というのも、明快な命題として、いくつもの情報を連鎖的に提示していく作業以上に、無数の折り目をひとつひとつ広げていくような徒労と疲弊に隣接した作業こそが、我々の思考に彷徨すべき未知の広大な領野の所在を教えられるように思えてならないからだ。

（松浦寿夫）

Trans-Cultural Studies No.14-15  
総合文化研究 第 14-15 合併号

2012 年 3 月 25 日発行

責任編集 松浦寿夫

編集スタッフ 石井沙和 顧姍姍  
朴翰彬 古川哲  
武文 陸嬋

発行 東京外国語大学 総合文化研究所

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

電話 042-330-5409

Fax 042-330-5410

Web <http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ics/>

e-mail [ics@tufs.ac.jp](mailto:ics@tufs.ac.jp)

印刷 三鈴印刷株式会社

東京都千代田区神田神保町二丁目 32 番地 1